

LITTLE BIG

第 76 号 2024. 2. 2

発行：福島県立図書館 こどものへや

〒960-8003 福島市森合字西養山1番地

TEL 024-535-3218

<https://www.library.fcs.ed.jp/>

【ごあいさつ】—『LITTLE BIG 準備号』より—

この『LITTLE BIG』は、「子供だけど大人」「大人だけど子ども」という人たちへのメッセージです。図書館の司書たちが読んだ本の中から、気になる文章をピックアップしてお知らせします。みなさんの心のアンテナにひっかかったら、ぜひその文章が載っている本を読んでみてください。



【Pieces - かけらたち - 】本の中の言葉

当館の職員が読んだ本の中から、素敵な言葉、心に残った言葉を集めました。みなさんの心にも届いたら、ぜひ手にとって読んでみてください。

- ◆「してはいけないからしない」、これは道徳であり、
「したくないからしない」、これが倫理である。
「罰せられるからしない」、これは道徳であり、
「嫌だからしない」、これが倫理である。
『言葉を生きる 考えるってどういうこと?』(池田晶子／著 筑摩書房 2022.6 p22)
- ◆「私を縛りつけていたのは、私自身だったの。
こうじゃなくちゃって、自分で自分を縛ってたの」
『不思議屋『風待ち』』(西村友里／作 こがしわかおり／画 文研出版 2022.3 p204)
- ◆どこかの国と戦争が始まりそうになったとき、相手の国にもし、たった一人でも
友だちがいたら、絶対反対するだろう。見知らぬどこかの国ではない。
友だちの国だからだ。
『パンに書かれた言葉』(朽木祥／作 小学館 2022.6 p225)
- ◆ひっそりと咲いて、ひっそりと散っていく。でも、だからこそ、わたしはこの花が
好きだ。目立たないから、地味だから、好きなのだ。地味だけど、たくましい。
それに、自由だ。風に乗って飛んでいって、着地した先で、新しい命をはぐくむ。
わたしは、そういう花でありたい。
『母の国、父の国』(小手鞠るい／著 さ・え・ら書房 2022.7 p8)

「自分」を知る。

あなたは「自分」についてどれくらい知っていますか？

家族とも友達とも違う、世界でたった一人の「自分」と、たまにはゆっくり向き合ってみませんか。

●『生きのびるための「失敗」入門』

(雨宮処凛／著 河出書房新社 2022.1)

10代の時に大人の失敗談を聞いたかったという著者の願いから生まれた本。失敗したっていいじゃない!面白くて深い、失敗の世界へようこそ。

●『自分疲れ ココロとカラダのあいだ』

(頭木弘樹／著 創元社 2023.4)

あなたの「本体」はカラダ?それともココロ?本書では主に文学を通して、自分の「本体」の場所について考えていきます。

●『あふれでたのはやさしさだった 奈良少年刑務所 絵本と詩の教室』

(寮美千子／著 西日本出版社 2018.12)

刑務所にいる少年たちは、みんな加害者になる前は被害者でした。絵本や詩の教室を通して、彼らの純粹すぎるほどの優しさが見えてきます。自分の生き方や周囲との関わり方を改めて考えさせられる一冊です。

＼YAの本棚から／

中高生のみなさん（YA）のためのコーナーからおすすめの本を紹介します。

『地図と星座の少女』

（キラン・ミルウッド・ハーグレイブ／作、オリア・ムーザ／絵、佐藤志敦／訳 岩波書店 2023.4 [933/Ⅷ](#)）



ジョヤ島に住む13歳のイザベラは、地図職人の父に地図づくりを習い始めます。ある日、少女が島の奥に行ったきり姿を消し、その失踪に責任を感じた総督の娘ループが少女を探しに出かけていきます。イザベラは友だちのループを探すため、総督が率いる捜索隊に加わり、禁じられた森に足を踏み入れます。未知の土地を地図と星座を読みながら進み、島の秘密に迫っていきます。

島に伝わる「ジョヤ島の守り神の伝説」に導かれたイザベラが、不思議な島の謎を解き明かす冒険ファンタジーです。

『放課後の読書クラブ』

（小手鞠るい／著 偕成社 2023.2 [019/Ⅲ](#)）



この本は読書を知るための「読書の本」です。作家である著者が今まで出会ってきた「運命の一冊」を紹介しながら、読者と一緒に読書について考えていきます。各章が「始業式」「1学期」「夏休み」など学校生活に沿っているため、実際に学校で読書を学んでいるような体験ができます。「読書」といっても、決して長い文章を読む必要はありません。著者が読書を通して得たものや、印象深い読書経験を語ってくれるので、まずはそれに耳を傾けてみましょう。もしその話に夢中になっている自分がいたら、あなたはもう読書の沼にいるのかもしれませんが。

『つる子さんからの奨学金』

（まはら三桃／作 偕成社 2023.3 [913/Ⅲ](#)）



中学2年生のわかばは、ある日、曾祖母のつる子から、今の自分の学力よりも1ランク上の高校に合格すれば、学費は奨学金としてつる子が出すという提案を受けます。それは、つる子が昔、女性であるが故に進学に苦労した過去があったからでした。母すみれの早業で、有名進学塾に入学したわかばでしたが、入塾テストで振り分けられたのは、最下位のEクラス。3年生になるとバレー部のベストメンバーに選ばれ、成績も上がっていきませんが、母のプレッシャーに耐えられず、塾を休んで祖母の家に行きます。そこで昔母が女性という理由で四年制大学の受験を諦めた話や祖母自身の話を聞きます。わかばは徐々に調子を取り戻し、挑戦する面白さを知っていく中で、同い年のいとこの樹が将来の夢を生き生きと語る姿に、自分の将来を考え出します。

『大絶滅は、また起きるのか？』

（高橋瑞樹／著 岩波書店 2022.6 [467/Ⅸ](#)）



大絶滅というと恐竜が絶滅したとされる巨大隕石の落下を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。これまで地球ではビッグ・ファイブと呼ばれる5度の絶滅が起きていて（巨大隕石は5度目の原因）、この本によると今現在6度目の大絶滅が進行中なのだそうです。巨大隕石と同じくらいのインパクトを与えているのは果たして……。

他にも絶滅の種類や定義、種の絶滅がほかの生物や環境に及ぼす影響など生物の多様性や生態系のしくみについての考え方がよくわかり環境保護やSDGsについて考えるための初めの1冊におすすめです。